

仮校舎での授業

校舎のほとんどを焼失するという悲運に見舞われた本校に対し、いろいろな方面から心強い声援が寄せられたことを忘れてはならない。

県教育委員会からは、日中は教室の空いている杜陵高校（定時・通信制校）を使ってはどうかとの申し入れがあった。また、工藤巖盛岡市長は「市内の小中学校で空いている教室を使っ

てもらってもいい」と表明した。さらに高松医院からも教室提供の申し出を受けた。分散を避けたという方針からこういった厚意は辞退せざるをえなかったが、その心遣いに本校は校長をはじめとして深く感謝したのである。

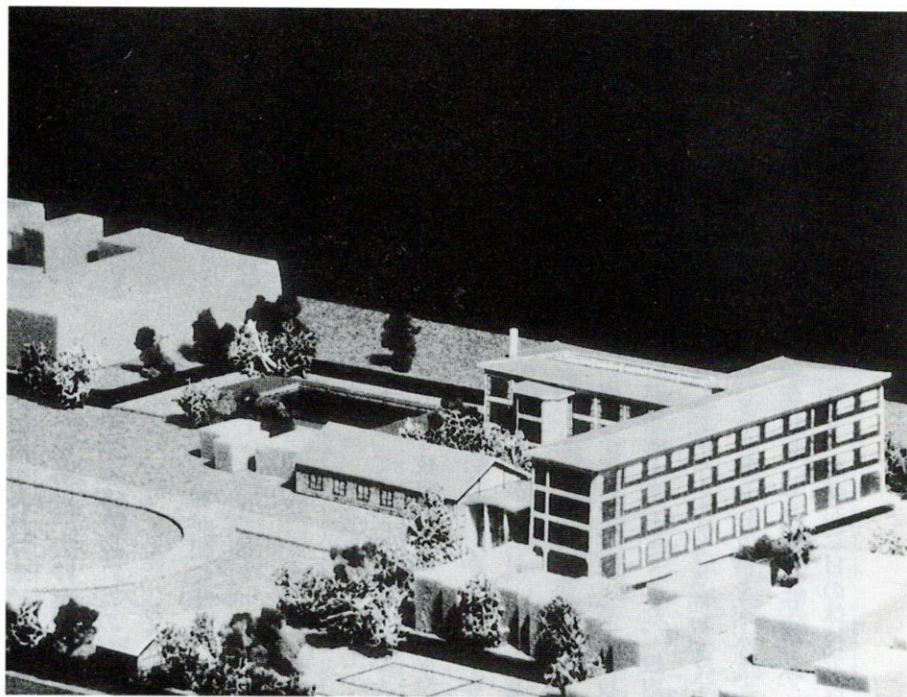
県内多数の中学校・高等学校生徒会が、本校に見舞金を送ってくれた。校内カンパした総額を、端数のついたまま届けてくれた学校も多かった。この暖かい友情を末永く記念するため、本校生徒会では見舞金で応援団の太鼓を購入した。さて、わずか二日の休校で授業再開にこぎつ

けたとはいえ、その実態は不自由きわまりないものであった。とくに高一と高二は講堂や雨天体操場を使つての二〇〇人を越す集団授業であり、正常な教育ができない状況のもとに置かれていた。

理事会では、何とかこの状態を改善しようと次々と決断をくだしていった。火災直後に机と椅子を発注し、旬日を経ないうちに講堂の間仕切り作業に取りかかった。この工事が四月二十五日の深夜に完了し、翌日から高一は四クラスに分かれて授業が受けられるようになった。続い

て五月一日には雨天体操場の間仕切りを行ない、高二も四クラスの授業に移行した。

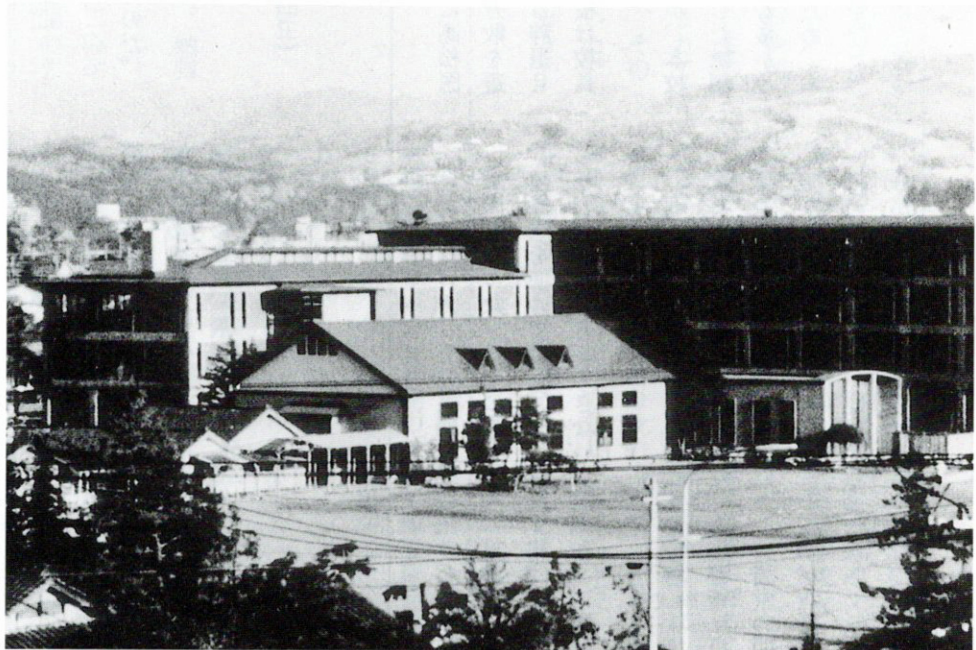
しかしこれだけでは雨天の体育や音楽などの授業ができず、正常化が実現したとは言えない。そこで本格的な校舎再建が成るまでのあいだ、プレハブ校舎を建てて教室数を確保することに なった。プレハブ校舎は二棟一教室で、五月



新校舎完成予定図

三一日に完成、翌六月一日一時限に中学三学級と高校八学級が教室の移動を終え、さっそく使用した。

火災から一カ月半ぶりにまがりなりにも授業が正常化し、校内にホッとした空気が流れた。あとの残された問題は、本格的な校舎再建をいつ、どういうかたちで始めるかということだった。



昭和54年に完成した西南から見る新校舎

新しい校舎に 魂を吹き込む

校舎焼失という突然の受難に、生徒たちの心が打ちひしがれるのではないかと心配されたけれども、それは杞憂に終わったようである。石

桜会（生徒会）の活動をみても、火災の一〇日後にはもう応援歌練習を開始している。また五月一六日に選出された桜会役員たちは、この際徹底的に生徒会のあり方を検討し、討議してみたいと申し出て、国立岩手山青年の家での二泊三日の集団研修を実現させた。その他全般的に、校内の土気は低下するどころかよいよ結束を固め昂揚していった。

並行して、桜会同窓会やPTAも頻繁に会合を持ち、新校舎の早期実現を学校側に要請した。このような動きも校内の動揺を未然に防いだ。

こうしたなか、四月下旬の理事会は現在地に校舎を再建する旨の決断を下し、その後の具体的な検討を経て八月の下旬に新校舎建設の計画が確定、九月二日には地鎮祭が執り行われた。



新校舎起工式

それから約一年のあいだ、母校には喜びと期待の槌音が響いた。昭和五三年八月二〇日、新しい校舎が竣工。歴史ある旧校舎の焼失は痛恨事であったが、災いを転じて福となし、ここに石桜一〇〇年の礎、石桜精神の新しい殿堂が確固として築かれたのである。

新校舎落成式において、遠藤校長は全校生徒にこう訓示した。

「スクール・イズ・ナット・ビルディング。学校は単なる建物ではない。この新しい校舎に魂を吹き込むのは君たちである」

新校舎が出来た喜びを、当時の中学三年生はこう綴っている。

新校舎ができてほんとうにうれしいと思う。私達の教室もきちんとできていてりっぱだと思った。まだ校舎全部は見えていないが、さっと見たところでは、ところどころにいろいろな装置がついていて、よくこれだけの装置をつけたと思う。

このような校舎ができるまでに、私達はいろいろな所で勉強をしてきた。寄宿舎で勉強をしたりしてきた。その寄宿舎でも勉強などもよい経験の一つだと思う。そして、数日がすぎてプレハブの校舎ができ、私達はプレハブの校舎に移った。移ったのはよかったけれども夏は暑くないへんなものだった。しかしまた、それも一つのいい経験だと思う。

もうプレハブの校舎とおさらばしてしまっただけで、今は、鉄筋コンクリート四階建ての、一階の一〇三号室という教室に入って勉強中である。

また、新校舎となって初めての卒業式で、卒業生代表は次のような答辞を読んだ。

火災は我々に大きな衝撃を与えました。新校舎落成までのプレハブ校舎での生活は決して恵まれた環境ではありませんでしたが、そのような不便な生活の中からいかなる困難にも屈することのない石桜精神を学び得ました。在校生諸君、新校舎落成の時に校長先生の申された訓辞を覚えているでしょうか。

新校舎に魂を吹き込むのは君たちであるということを。

その時、我々は新しい伝統を造りあげようという決意を新たにしましたが、歳月の流れと共にその決意も忘れられてきています。後輩諸君、もう一度あの時に戻って決意も新たに再出発して下さい。

あれから早や二〇年が経とうとしているが、このメッセージはいまなお読む者の胸に迫る重みをもっている。いま母校に学ぶのは校舎焼失の後に生まれた世代だが、苦難を乗り越えて大きく成長した先輩たちの精神を長く受け継いでいくべきであろう。